公園での生活：台北市における公園野宿者と政府の管理について

黄克先
台湾大学社会学科助教

この5年来、ホームレス（the homeless）に対する社会的注目は高まっているが、彼らは依然として孤独である。台湾社会はホームレスをどのように扱ってきたか。権威主義時代は軍や警察の力によって犯罪者とみなされた浮浪者を処罰し、戒厳令解除後は社会福祉の力により彼らを救い訓練しようと試み、最近では多くの人権派や批判意識をもつ学者や民間団体が、一般大衆が浮浪者に抱く悪いイメージを払拭し、平等や同情の心から彼らと関わり合おうとしている。ただし、ホームレスの見せる顔が凶暴性から哀れみの対象、そして身近な存在へと変わっても、その姿はなお孤独なままである。写真家、記者、非営利組織、学者が表現するホームレスは、多くの場合たった一人で、彼らの社会関係は見えてこない。この社会関係は、内部、外部に築く二つの関係が含まれている。かつて病気や犯罪の根源でしかないと思われていたホームレスは、徐々に物語性や独自の観察力、芸術的な天性をもつ存在となった。ホームレスの群集性や頻繁なやり取り（公園、駅、社会福祉局や教会で食事を待つ間、面識のある人同士で挨拶をしたり、生活情報を交換したり、時には別のホームレスを評価したり、自身が属するホームレスという集団について論じる声が聞かれることもある。また困った時は、仲間同士の助け合いを非常に頼りにしている）に気づく研究者も増えてきたとはいえ、彼らの内部の異質性が浮き彫りになることは無いため、ホームレスの間で築かれた社会関係も見えてこない。一方、外部との社会関係についても非常に狭い認識で、ホームレスと地域とのつながりは見えてこない。ホームレスは永遠に地域にとってのよそ者、侵入者であり、近隣の住民との関係性も、排斥や排除といった可能性しかない。

はじめに、公園にいるホームレスの間に、どのような違いがあるか考えてみたい。彼らをいくつかのタイプに分類することは可能だろうか。私は3つの非常に重要な要素が、ホームレスの異なるサブグループや生活様式の形成に影響していると考える。まず、仕事の違いはホームレスの生活に大きく影響する。これは単なる物質的な問題ではなく、アイデンティティーや尊厳にも関わってくる。底辺層の人々にとって、仕事は単なる金稼ぎではなく、他人と関わり、自己効力感を高める手段であり、困難の中で新たに人生の意味を見つける助けになるものである。仕事があれば、ホームレスの内部で見下される「同類」との間に線を引くこ

ともできる。次に、住む場所が流動的か固定的かという点も重要な違いである。これはホームレス本人の心身の状態と関係があり、その場所のコミュニティメンバーと安定して交流できるかにも関わってくる。これは次節でホームレスが地域の一員であると述べる際に、さらに詳しく説明したい。また、「国の援助を受けているか否か」もホームレスの生活を決める重要な要素だと考えられる。これも物質的な面だけでなく、自己意識にまで関わる問題である。援助を受けている人の多くは、自尊心を傷つけられ、ソーシャルワーカーから福祉泥棒のような目で見られることを受け入れ、自分自身も、ホームレス仲間からも「救済に値する貧民（deserving poor）」の仲間入りを果たしたのは「先がない」からだと思われ、自分は社会の安定に奉仕する道具にすぎないと感じてしまう。しかし、これまで台湾のホームレス研究では、この点が彼らの生活や人間関係に生み出す違いに焦点を当てたものはなく、私は本研究の中で、こうした社会福祉援助がホームレスの社会生活にどのような影響を及ぼすのか、深く考察していきたいと考えている。最後に、性別はホームレスの境遇を左右する重要な鍵であると、すでに多くの海外の研究者が証明している。国の社会福祉体制や一般的な社会の認識において、女性は生まれつき家庭に入り次の世代を育てることに長じているとみなされている。ホームレスになったのは外からの力によるものであり、さらに女性は公的領域において被害を受けやすい対象であるという認識があるため、女性ホームレスは収容施設に保護され訓練を受け、社会資源を提供される傾向が強い。反対に、男性は現在の境遇を作ったのは自分に原因があると思われ、救済に値しない貧民（undeserving poor）という汚名を着せられる。類似の現象は台湾でも証明されている。以上3つの要素がホームレスの分類を試みる際の切り口となる。

続いて、異なるタイプのホームレスが一体どのように繋がり合っているか、さらに踏み込んで考察しよう。この問題は、ヒエラルキーというタテの方向と、ネットワークというヨコの方向という2つの方向から考えていきたい。ヒエラルキーに関しては、過去の都市民族誌でしばしばこう指摘されてきた。底辺層の人々は、そのタイプによって社会資源や能力（経済力、移動能力、社会福祉情報、地域との繋がり、社交性等）に差があり、交流を通じて階級の違いが生じてくる。ホームレスの中には、人を使う立場から指導者になる者もいれば、命令に従うしかない者もいる。最も日常的な場での会話や交流の中からも、この一端を窺い知ることができる。また、しばしばこうした階級の違いは、単に経済的利益によるものではない。階層を見分ける象徴も存在し、人々は、関わり合いの中で尊厳の維持やたくましさの表出を追求しようとすると同時に、公平さ、正義、正当性とは何なのかを確認しながら、道徳的、経済的な秩序を形成していく。一方、ヨコの方向については、面識のないホームレス同士がどのように交流を開始するのか

に注目することができる。どのような金の貸し借りや贈り物の交換から始まり、流動的な関係をいかに安定化しようとし、どうやって社会的ネットワークを展開していくのか。また、互いの名前や過去の人生も知らない状況において、どのように社交的な会話を行うのか。こうした「落ちぶれたもの（台湾語は「艱苦人」という）同士」の人間関係は、家庭における家族、組織における同僚、団体（ロータリークラブ等）におけるメンバー、日常生活における見知らぬ人の間の結びつき（ties）とは、どのような類似点及び相違点があるのだろうか。艱苦人同士の関係は、ホームレスが生活の中で危機（病気、暴力、盗難）に遭遇した時、どのような役割を果たすのだろうか。人々にとっては価値のないものに見える、脆弱で刹那的で、用が済んだら終わりの「使い捨ての結びつき（disposable ties）」が、社会資源の乏しい者にとっては、絶望の淵での重要な資源の通り道になるのだろうか。

公園に場所を絞った民族誌の研究から、かつて気づかれることのなかった「ホームレスの外側の社会関係」を浮き彫りにすることができる。この関係とは、(1) 制度化された正式（表に見える）関係網（ホームレスを支援する社会福祉局等の政府機関、非営利団体、及びホームレスとはやや対立関係にある都市開発や観光産業を扱う政府部門や地域住民）とホームレスの関係だけではない。より重要なのは、過去の文献では見られなかった（2）非正式（水面下の）関係網とホームレスの関係で、これにはホームレスに対し友好的ではない政府部門や地域住民も含まれる。中でも土地開発や観光に関連がある場合は顕著である。この点は、今日とりわけ注意する必要がある。レポート執筆の期間中、台北市は2016年12月20日に万華区（台北駅西部の地区）で「移動式市議会」を開き、艋舺公園の改造計画、市場の改築計画、西区門戸計画（台北駅周辺一帯の開発計画）等の成果を公表し、地下鉄龍山寺駅地下街の文化クリエーションエリアの開幕を宣言した。柯文哲台北市長は、「1年あまりの努力によって、台北の基幹軸は変革しつつある。西区はすっかり変わった」と述べた。さらに、変革の最初の困難は浮浪者問題だったが、各部会や首長の協力により顕著な改善が見られ、おかげで今後は多くの観光客が予想されるため、公園の地下一階には観光サービスセンターを設置したのだと明言した。今後、政府機関や民間組織、都市開発会社や地域における特定の力が、艋舺公園の周囲に集まる大量のホームレスに対し、立ち退き、シェルター設置、取り締まり等の強行又は柔軟な行動を起こすかどうか。これは台北西区の再開発及び観光発展の波の中で今後さらに観察の価値がある。観光発展を望むあまりホームレスを目に見えない場所へ追いやることは、ホームレスを「路上生活からの脱却」から遠のかせ、より苦しい生活へ陥らせる方法であると、過去の研究では指摘されている。

また、ホームレスの内部にも豊富な「非正式関係網」が存在する。ここからも、彼らがすでに地域の一員となっていることが分かる。ホームレスは1人孤独に彷徨っているのではなく、外の世界と新たな結びつきを作り続け、社会と関わり合う存在なのだ。こうした関係網は経済性、社交性、宗教性の3つの側面をもつ。経済性についていうと、艋舺公園周辺にも、多くの活発な地下経済（ロッタリー、賭博性の囲碁・将棋、屋台、中古品を扱う「賊仔市（盗品市）」）や商店が存在している。また、廉価な労働力を求めて多くの職工頭が公園を訪れる。社交性についていうと、艋舺公園に詳しい学者や第一線で働くソーシャルワーカー、地域の歴史研究者であれば知っているように、公園にはしばしば大量の大台北地区（台北市、新北市、基隆市）で暮らす底辺層や老人が集まり、世間話やレクリエーションに興じ、ホームレスと共に善人からの寄付を待っている。こうした人々とホームレスはしばしば互いに情報や物資を交換し、自分の過去や世間の出来事についてとりとめもない話をする。こうした一見何ということもない日常会話の中に、実は「運命の重荷を下ろす」、「人生の意味を再定義する」といった積極的な社交性が隠れている。これは目的をもたない社会交流の一種なのである。艋舺公園にいる低所得世帯、独居老人、やくざ、性労働者といった、家こそあるものの生活はホームレスと大差ない多様な人々について同時に考慮してみることは、同様に特定の構造的暴力被害に遭っている「底辺層」又は「のけ者（the outcast）」が、いかに異なる身分に流れていったかを理解する助けになる。また、過剰にホームレスの特殊性を強調することを避け、ホームレス周辺の底辺層及びホームレスを脱した人々の状況を併せて考えることもできるようになる。

宗教はホームレスが日常生活においてしばしば接する社会制度であり、台湾の社会では、欧米のケースとはまた違った特色が見られる。比較的よく目にする欧米の制度的な宗教と比べ、台湾の公園で頻繁に見られるのは、より生活の中に入り込む拡散宗教（diffused religion）、つまり民間信仰によって築かれる関係である。こうした信仰心によって、一つには現実の仕事の機会が与えられる。ホームレスはしばしば宗教活動への参加（例えば陣頭（廟のパレード）への参加や法会の準備の手伝い）により給料を受け取るが、大抵この種の仕事は求められる能力が極めて低く、身体や精神の機能が一般人より劣っても参加できる。ホームレスにとって、こうした宗教的な労働と世間一般の労働は、何らかの違う意味を持つだろうか。同じ地域内で大勢で盛り上がる「お祭り騒ぎ」の雰囲気に参加することは、ホームレスに物質的な報酬以上のものをもたらし、地域住民との距離を縮めることにすらなるのではないか。二つ目に、信仰心によりホームレスに必要な食料品や日用品が提供される。こうした提供行為は制度的な宗教のそれとは

全く異なると私は考える。まず、廟が主催した慈善救済活動の場合、公的な救済を受ける時と比べ、恥ずかしさや訓練を受けているという気持ちをあまり感じずに済む。さらに、民間信仰の救済活動では、信徒自身が高い自発性をもち、組織の仲介（mediation）というイメージが取り除かれる傾向がある。信徒は貧困に苦しむ衆生が集まる場所に来ては物資を支給するが、それは神職や組織が発起したものとは限らず、信徒が教えや手本となる人に感化されて、一人で又は複数名で行ったものであったりする。さらに、こうした行為は「成果よりも事を成すことこそが重要」という思いによるもので、信徒は路上生活の問題解決よりも、自身の善心が実現したか、救済品が苦しむ人の元に届いたかを重視し、功徳が重なり「福田に種がまかれる」又は「功徳の回向」の効果で親しい人に恩恵をもたらすと考えている。こうした助ける人と助けられる人の関係は、上述の制度的宗教とは全く異なり、両者の違い、及びそれがホームレスにとってどのような意味を持つのかは、比較するに値する。最後に、信仰心はホームレスに生活の目的や人生の意義を与える。ホームレスは孤独で、安全も脅かされ、物質的に乏しく、差別を受け、世間のいわゆる「希望」のある環境には置かれていない。よって生活の目的や人生の意義を探すのは容易ではない。ホームレスは、来世（other-worldly）の宗教的な「補償」に希望を託すのだろうか。あるいは民間信仰の中の理念、物語、理論は、ホームレスが今の境遇に見えない意味を見出す助けになるのだろうか。また、こうした宗教が導く自身の反省は、ホームレスの日常の倫理観や人間関係にどのように影響するのだろうか。以上の問題はさらに深く考察していく意義があるだろう。